

# 非母語話者の「はい」と「ええ」の使い分けについて

金山泰子・二宮理佳

## 【要 旨】

本稿では、筆者らが2006年に実施した「はい」「ええ」に関する調査結果のうち、非母語話者13名の回答結果を分析・考察し、学習歴および日本滞在歴により応答表現に関する意識がどのように違うか、傾向を分析した。その結果、学習歴と日本滞在歴の合計が9年以上の被験者と9年未満の被験者とで、いくつか顕著な違いが見られた。「はい」「ええ」の使い分けについて、9年以上の被験者と9年未満の被験者とは正答率に倍以上の開きが見られた。教室活動や日常生活において接する機会が多いと思われる場面での使い分けについては全体的に正答率が高かった。9年未満の被験者は、主に親疎や上下関係などの改まり度に注目して「はい」「ええ」の使い分けをしている。そのため「ええ」が使用可能な場面でも、使用できないと考える被験者が多かった。

## 【キーワード】

「ええ」 「はい」 応答表現 日本語学習者 学習歴

## 1. はじめに

「はい」「ええ」は、コミュニケーションにおいて極めて頻度の高い言葉である。しかしながら「はい」「ええ」を状況や対話場面で意識的に使い分けられる非母語話者は稀だと思われる。「はい」「ええ」という表現は初級において早い時期に初出しているが、テキストにおいては「はい」「ええ」ともに肯定の意味を表し、「ええ」は「はい」よりややゆだねた表現である、といった程度にしか説明されていない(二宮・金山2008)。しかし「はい」「ええ」は常に置き換え可能ではなく、また単なる丁寧さだけの違いではない。筆者らのこれまでの調査では、「はい」「ええ」の使い分けには発話者の気持ちに関わっていること、また「ええ」という表現には特定の「イメージ」があるということ、また「ええ」の解釈は人によって多様であること等が浮かび上がってきた(金山・二宮2007、2009)。調査から得た知見を日本語教育の現場に活かすためには、非母語話者の意識を学習歴・日本語能力別に分析する必要があると思われる。

そこで本稿では、筆者らが2006年に実施した「はい」「ええ」に関する調査結果のうち、非母語話者13名の回答結果を分析・考察し、学習歴および日本滞在歴により使い分けがどのように違うか、傾向を分析する。

## 2. 先行研究

北川(1977)、日向(1980)は「はい」には「認知」、「ええ」には「同意」の機能があるとする。また McGloin(1997)は「はい」の機能を「談話・場面を進行させる」、「ええ」の機能を「参加・協調」と説明している。富樫(2002)は、「はい」の機能を「提示された情報に対し、それに関連した半活性化情報が多数呼び出されたことを示す」と定義している。筆者らは

これらの基本的な定義をふまえた上で、「ええ」の機能に着目し分析を進めてきた。

まず、二宮・金山(2006)は「はい」のみ使える文例、「はい」「ええ」が共に使用可能な文例について分析し、「はい」との比較を通して「ええ」の機能について考察した。その結果、「はい」「ええ」の使い分けには対話者が共有する情報の度合いが関与しているのではないかという結論に至った。共有する情報の度合いは話者間の関係を決定づけ、親疎・待遇関係へと密接に関わっていると考えられる。また、「ええ」は自己の主張・感情を積極的に表明する応答であり、「ええ」での応答は話者間の情報共有を表明し、相手に対し自らを同等な立場に位置づけると考えられる。故に不適切に「ええ」を使えば親近感・同等感を超えて相手に失礼な印象を与える可能性もあることを指摘した。

金山・二宮(2007)では、学習者が「はい」「ええ」を適切に使い分けるための指導を考察する足がかりを見出すためアンケート調査を実施し、非母語話者と母語話者の「はい」「ええ」に関する認知・解釈、使用状況を比較した。その結果、「ええ」は個々の意識によってその使い方・捉え方が異なるということがわかった。つまり、人によって、または状況によって、待遇や丁寧さや改まり度に意識を置くか、相手との関係を意識するか、話者の気持ちの表明を重視するか等々が異なるため、使い方・受け取り方に幅が出てくるのではないかと考察した。

さらに金山・二宮(2009)の研究では、母語話者を対象に漫画を使用したアンケートを実施し、「はい」「ええ」の機能・効果、使い分けの判断の基準、意識の違いについて調査を行った。その結果、使い分けの要因を「話者の気持ち」とした回答が多く見られ、特に「ええ」の選択理由には、「話者の気持ち」、「話者のイメージ」、「『ええ』が持つイメージ」という回答が多かった。

続いて二宮・金山(2010)は、テレビ映像を用いたインタビュー調査を3名の母語話者を対象に実施し、「はい」「ええ」の使い分け、および「ええ」の機能について考察を試みた。調査の結果、先行研究および筆者らの考察結果が再確認された。

非母語話者の意識を学習歴・日本語能力別に調査することは筆者らの課題の一つであった。そこで今回の調査では、2006年に筆者らが実施したアンケート調査から、調査対象者を非母語話者にしぼり考察を試みた。

### 3. 2006年のアンケートの概要

二宮・金山(2006)は、以下の2点を明らかにするために例文を用いたアンケートを実施した。母語話者は「はい」と「ええ」の違いをどのように認識し、使い分けを行っているのだろうか。また非母語話者はどのように意識しており、母語話者との間にどのような認識の違いが見られるのであろうか。調査対象者は、日本語母語話者29名と日本語非母語話者15名であった。質問は以下の3セクションに分かれる。まず質問Ⅰでは、11の会話例から「はい」「ええ」の適切さを○×△で記してもらった。なお△は「条件によっては可能と思われる」ものである<sup>(1)</sup>。質問Ⅱは「はい」「ええ」を使った2つの会話例から話者の関係を推測するものである。質問Ⅲでは「ええ」の使用頻度、質問Ⅳ、Ⅴでは「はい」「ええ」の使い分けに関係する要因について記述するよう求めた。アンケートはメールで依頼、または対面で記入を依頼した。対面の場合は可能な範囲で聞き取りを行った。

#### 4. 今回の調査

本稿では、上記のアンケートから非母語話者の質問Ⅰに対する回答結果をとりあげて考察を試みる。ただし、回答者 15 名のうち 2 名は学習歴が不明であったため、13 名を対象とする。

##### 4.1. 被験者 13 名の内訳

表 1：被験者 13 名の内訳

	学習歴	日本滞在歴	学習歴 + 日本滞在歴	国籍	性別	年齢	職業
1	半年	5ヶ月	9ヶ月	中国	男	29	エンジニア
2	1年2ヶ月	4年	5年2ヶ月	中国	女	34	IT関連
3	3年	1年	4年	中国	男	40	会社員
4	3年	1年半	4年半	中国	女	31	エンジニア
5	4年	1年	5年	中国(香港)	女	24	営業
6	4年	2年	6年	中国	男	37	エンジニア
7	4年	2年	6年	中国	男	31	会社員
8	4年	6年半	10年半	中国	男	31	会社経営
9	4年	5年	9年	中国	男	39	翻訳・通訳
10	5年	8年	13年	中国	女	36	学生
11	7年	6年7ヶ月	13年7ヶ月	中国	女	33	会社員
12	10年	2年	12年	中国	女	32	会社員
13	12年	1年	13年	オーストラリア	女	23	オーストラリア 外務省勤務

学習歴別に見ると、1年未満が2名、3～5年が8名、5～10年が2名、10年以上が1名となっている。国籍は中国が12名、オーストラリア1名である。男女比は、女性7名、男性6名である。年齢別に見ると、20代が3名、30代が9名、40代が1名で、1名の学生を除いて全員が社会人である。

##### 4.2. 結果と考察

被験者の学習歴について詳細な調査は行なっていないため、学習のペース、学習時間数、学習機関(国内か海外か)、使用教材などについては明らかになっていない。したがって学習歴が同じであっても学習時間数が異なる場合も予測でき、単純に学習歴のみによって回答結果を比較することはできない。しかし、学習歴と日本滞在歴を足した年数が9年未満の被験者(1～7)と9年以上の被験者(8～13)を比較してみると、質問Ⅰの回答結果にいくつか顕著な傾向が見られた。そこで本稿では、日本語学習歴及び日本滞在歴が9年未満の被験者と9年以上の被験者について、その傾向の違いを比較・検討する。以下では、質問Ⅰの1～11の会話例別に被験者の回答結果を示しつつ、分析する。表中の網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分が正答の数字である。

質問Ⅰでは、あらかじめ状況を設定した11の会話例を示し、自然なものには○、不自然または変だと思われるものには×、条件によっては可能と思われるものには△を記入

するよう求めた。

- 例 1 状況：旅行から帰ってきた夫が妻におみやげを渡すところの会話  
( ) A：はい、おみやげ。 ( ) A：ええ、おみやげ。  
B：ありがとう。 B：ありがとう。

例 1 は先行文がない場合の例である。「はい」は先行文を必要とせず、情報を持たない相手に対して一方的に情報を提示することができるが、「ええ」は何らかの情報に対する応答として現れる。従って適切な回答は「はい」のみである。以下に回答結果を示す。

表 2：例 1(お土産)の回答結果

\* 網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9 年以上	9 年未満
はい○ええ×(正答)	6	1
はい○ええ△	0	2
はい×ええ○	0	3
はい×ええ△	0	1
合計	6	7

学習歴と日本滞在歴の合計が 9 年以上の被験者(以下、9 年以上と表記する)については以下の回答が得られた。6 名全員が「はい」を自然、「ええ」を不自然と正しく回答した。

学習歴と日本滞在歴の合計が 9 年未満の被験者(以下、10 年未満と表記する)については以下の回答が得られた。正答は 1 名のみで、6 名は誤答であった。「はい」は自然、「ええ」は条件によっては可能と答えた人が 2 名、「ええ」が自然、「はい」は不自然と答えた人が 3 名、「ええ」は条件によっては可、「はい」は不自然と答えた人が 1 名であった。

先行文がない場合には「ええ」を使用できないということを、9 年以上の被験者は全員が認識しているが、9 年未満の被験者においては、7 名中 1 名しか認識できていない。

- 例 2 状況：教室で先生が出席をとっている  
( ) 先生：山田君。 ( ) 先生：山田君。  
山田：はい。 山田：ええ。

例 2 は先行文が呼びかけ語からのみ成り立つ場合の例である。呼びかけ語とは「～君」「すみません」等である。これらは「情報」と言えるほどの内容を伴っておらず、話者間の情報の共有はないため「ええ」は使用できない。よって適切な回答は「はい」のみである。

表 3：例 2(出席)の回答結果

\* 網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9 年以上	9 年未満
はい○ええ×(正答)	6	6
はい△ええ×	0	1
合計	6	7

9年以上の被験者については以下の回答が得られた。6名全員が「はい」を自然、「ええ」を不自然と正しく回答した。

9年未満の被験者については以下の回答が得られた。正答は6名で、1名は「はい」は条件によっては可能、「ええ」は不自然とした誤答であった。

呼びかけに対しての応答は「はい」でしかできないことを9年以上の被験者は全員が認識しており、9年以下の被験者も7名中6名が認識できていることがわかる。

**例 3-1** 状況：大学を訪ねた訪問者が聞きたいことがあるので、事務室で事務員に声をかけるところの会話

( ) 訪問者：すみません。 ( ) 訪問者：すみません。  
事務員：はい。 事務員：ええ。

例 3-1 も先行文が呼びかけ語からのみ成り立つ場合の例であるため、適切な回答は「はい」のみである。

**表 4：例 3-1 (問いかけ) の回答結果** \* 網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9年以上	9年未満
はい○ええ×(正答)	5	4
はい○ええ△	0	2
はい△ええ×	0	1
はい○ええ△	1	0
合計	6	7

9年以上の被験者については以下の回答が得られた。5名が「はい」を自然、「ええ」を不自然と正しく回答した。1名が「はい」が自然、「ええ」は条件によっては可と答えた。

9年未満の被験者については以下の回答が得られた。正答は4名で、2名は「はい」は自然、「ええ」は条件によっては可能と答えた。1名は「はい」は条件によって可能、「ええ」は不自然と答えた。

呼びかけに対しての応答は「はい」でしかできないことを9年以上の被験者は6名中5名が認識しており、9年未満の被験者においては7名中2名が認識している。

**例 3-2** 状況：大学を訪ねた訪問者が聞きたいことがあるので、事務室で事務員に声をかけるところの会話

( ) 訪問者：すみません、ちょっと ( ) 訪問者：すみません、ちょっと  
伺いたいんですが。 伺いたいんですが。  
事務員：はい。 事務員：ええ。

例 3-2 も先行文が呼びかけ語で始まっているが、呼びかけの後に「伺ってもいいか」

という許可を求める部分があるため、先行文の情報量が増している。したがって一見「はい」が自然のように思われるが、情報量が増していることにより、「ええ」が使える可能性も高まっていると考えられる。この例文は例 3-1 よりも先行文の情報量が増すことで、「ええ」の許容度はどのように変わるかを見ようとしたものである。自然な応答は「はい」であるが、3-1 よりも「ええ」の許容度が上がっているのではないかと推測される。

表 5：例 3-2 (問いかけ +  $\alpha$ ) の回答結果 \*網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9 年以上	9 年未満
はい○ええ×	2	5
はい○ええ△	2	1
はい○ええ○	1	0
はい△ええ×	1	1
合計	6	7

9 年以上の被験者については以下の回答が得られた。2 名が「はい」を自然、「ええ」を不自然と回答した。2 名が「はい」が自然、「ええ」は不自然と答えた。1 名が「はい」は条件によっては可能、「ええ」不自然だと答えた。1 名が「はい」も「ええ」も自然であると答えた。「はい」は条件によっては可、「ええ」は不自然だと答えた。

9 年未満の被験者については以下の回答が得られた。5 名が「はい」は自然で「ええ」は不自然と答えた。1 名は「はい」が自然、「ええ」が条件によっては可能と答えた。1 名は「はい」は条件によっては可、「ええ」は不自然と答えた。1 名は「はい」は条件によって可能、「ええ」は不自然と答えた。

9 年以上の被験者においては、例 3-1 に比べ「ええ」を使えるという回答が増えているのに対して、9 年未満の被験者は、例 3-1 と比べ「ええ」を使えるという回答が少なくなっている。つまり、9 年以上の被験者は、話者同志が共有する情報量が増すことにより「ええ」が使える可能性が高まることを認識しているのではないかと考えられる。一方、9 年未満の被験者は、共有する情報量と「ええ」の許容度との関係に意識が及んでいないのではないと思われる。

例 4 状況：スポーツセンターで若いインストラクターが年配の利用者に使い方を説明している

- ( ) 若いインストラクター：このレバーを使うと、椅子の高さが調節できます。  
年配の利用者：はい。
- ( ) 若いインストラクター：このレバーを使うと、椅子の高さが調節できます。  
年配の利用者：ええ。

例 4 は一方から他方へ情報が伝達されるという状況の例である。二者間の情報の共有の度合いは低いため、適切だと考えられる回答は「はい」である。また利用者の方が年配であるため、改まり度から考えると「ええ」も使えそうだが、「ええ」を使うと利用者はインストラクターから提示された情報を既に知っているということになり、説明される前から使い方がわかっているという印象が生じると考えられる。

表 6：例 4（インストラクション）の回答結果\*網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9 年以上	9 年未満
はい○ええ×(正答)	3	1
はい○ええ△	1	1
はい○ええ○	1	0
はい△ええ○	1	1
はい×ええ△	0	1
はい×ええ○	0	3
合計	6	7

9 年以上の被験者については以下の回答が得られた。3 名が「はい」を自然、「ええ」を不自然だと正しく回答した。1 名が「はい」が自然、「ええ」は条件によっては可能と答えた。1 名が「はい」も「ええ」も自然であると答えた。1 名が「ええ」が自然で、条件によっては「はい」も可能と答えた。

9 年未満の被験者については以下の回答が得られた。1 名が「はい」は自然で「ええ」は不自然と正しく答えた。1 名は「ええ」が自然、「はい」が条件によっては可能と答えた。1 名は「ええ」は条件によっては可、「はい」は不自然と答えた。3 名は「ええ」は自然、「はい」は不自然と答えた。

9 年以上の被験者の正答率は 6 名中 3 名であったのに対し、9 年未満の被験者は 7 名中 6 名もが誤答で、「ええ」を許容している。

例 5 状況：教師が学生に向かって注意している

( ) 教師：もっとしっかり勉強しなさい。 ( ) 教師：もっとしっかり勉強しなさい。  
 学生：はい。 学生：ええ。

例 5 は命令文の例である。「ええ」と使うと自分に向けられた命令に対し、「自分もそう思う」と応答することになるため「ええ」は使用できず、適切な回答は「はい」である。

表 7：例 5（注意）の回答結果

\*網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9 年以上	9 年未満
はい○ええ×(正答)	6	5
はい○ええ△	0	1
はい△ええ×	0	1
合計	6	7

9 年以上の被験者については 6 名全員が「はい」を自然、「ええ」を不自然と正しく回答した。

9 年未満の被験者については、5 名が「はい」は自然で「ええ」は不自然と正しく答えた。また 1 名は「はい」が自然、「ええ」は条件によっては可能と答えた。1 名は「はい」は条件によっては可、「ええ」は不自然と答えた。

命令文に対する応答は「はい」であるということ、9 年以上の被験者は全員が認識

しているが、9年未満の被験者は、7名中2名が認識できていない。

例6 状況：映画館の窓口の従業員が客に上演時間の説明をしている

( ) 客：〇〇の late show は何時からですか？

従業員：はい、8時からです。

( ) 客：〇〇の late show は何時からですか？

従業員：ええ、8時からです。

先行文が疑問詞を伴う質問文で、聞き手に情報を求める場合の会話例である。日向(1980)は疑問詞を伴う質問文に同意応答の「ええ」で応じるのは一般的でないとしている。これは二宮・金山(2006)の考察によれば、「ええ」は情報を持たない発話に対する応答としては使えないからである。特に、「情報を提供することが職業的に求められる場合は『はい』による応答が自然である」(56)と考えられる。

表8：例6(映画館)の回答結果：映画館 \*網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9年以上	9年未満
はい○ええ×(正答)	5	4
はい○ええ△	0	1
はい○ええ○	1	0
はい△ええ×	0	1
はい×ええ○	0	1
合計	6	7

9年以上の被験者については以下の回答が得られた。6名中5名が「はい」を自然、「ええ」を不自然と正しく回答し、1名が「はい」「ええ」ともに自然であると答えた。

9年未満の被験者については以下の回答が得られた。4名が「はい」は自然で「ええ」は不自然と正しく答えた。1名は「はい」が自然、「ええ」は条件によっては可能と答えた。1名は「はい」は条件によっては可、「ええ」は不自然と答えた。1名は「ええ」が自然、「はい」は不自然であるとした。

9年以上の被験者は疑問詞を伴う質問文に対して「はい」で応答するのが適切であるということを6名中5名が認識しており、9年未満の被験者は7名中3名が認識している。

例7-1 状況：客がデパートの従業員に本屋の場所について聞いている

( ) 客：本屋はこの階ですか。 ( ) 客：本屋はこの階ですか。

従業員：はい、そうです。

従業員：ええ、そうです。

例7-1は、「はい」「ええ」ともに使用可能である。

一般的に真偽疑問文に対する肯定応答としては、「はい」「ええ」「うん」が相手・場面などにより待遇的に使い分けられるとされている(日向1980)。この例7-1においては、例6と同様、デパートの従業員と客という情報提供者と情報の受け取り手という役割が固定されており、また待遇面から考慮しても「はい」の適切さが増すと思われる。

表 9：例 7-1(店員と客)の回答結果

\* 網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

	9 年以上	9 年未満
はい○ええ○(正答)	2	0
はい○ええ×	3	6
はい△ええ×	0	1
はい×ええ○	1	0
合計	6	7

9 年以上の被験者については以下の回答が得られた。2 名が「はい」も「ええ」も自然であると正しく回答した。3 名が「はい」が自然、「ええ」は不自然だと答えた。1 名が「ええ」が自然、「はい」は不自然だと答えた。

9 年未満の被験者については以下の回答が得られた。「はい」「ええ」とともに自然という正答を選んだ人はゼロだった。6 名が「はい」は自然で「ええ」は不自然と答えた。

1 名は「はい」が条件によっては可能、「ええ」は不自然と答えた。

9 年未満の被験者は全員が「ええ」を不自然としていることから、主に「はい」「ええ」を改まり度の観点から判断していることが推測できる。

例 7-2 状況：デパートで客が通りがかりの他の客に本屋の場所について聞いている  
 ( ) 客：本屋はこの階ですか。 ( ) 客：本屋はこの階ですか。  
 客：はい、そうです。 客：ええ、そうです。

「はい」「ええ」とともに使用可能である。例 7-1 と同様の会話であるが、話者を客/従業員ではなく、客/客という同等のレベルに設定し、「ええ」が使える可能性が例 7-1 より増すことを予測したものである。

表 10：例 7-2(客同士)の回答結果

\* 網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9 年以上	9 年未満
はい○ええ○(正答)	3	0
はい○ええ△	1	2
はい○ええ×	1	2
はい×ええ○	1	2
はい△ええ×	0	1
合計	6	7

9 年以上の被験者については以下の回答が得られた。3 名が「はい」も「ええ」も自然であると正しく回答した。1 名が「はい」が自然、「ええ」は条件によっては可能だと答えた。1 名が「はい」が自然、「ええ」は不自然だと答えた。1 名は「ええ」が自然、「はい」が不自然であると答えた。

9 年未満の被験者については以下の回答が得られた。「はい」「ええ」とともに自然とい

う正答を選んだ人はゼロだった。2名が「はい」は自然で「ええ」は条件によっては可能だと答えた。2名は「はい」は自然、「ええ」は不自然と答えた。また2名は「ええ」が自然、「はい」は不自然だと答えた。1名は「はい」は条件によっては可能、「ええ」は不自然であると答えた。

9年以上の被験者では、6名中5名が、立場が同等の話者間では「ええ」が使える可能性が高まることを認識しており、9年未満の被験者においては7名中4名が認識している。9年未満の被験者においては、立場が同等の話者間では「ええ」が使える可能性が高まるということを7名中3名が認識できていない。

**例8** 状況：中村と鈴木は大学勤務の同僚。研究室で、中村が先輩(=田中)の書いた本を見つけ、鈴木にたずねる

- ( ) 中村：田中先生、本をお書きになったんですね。  
鈴木：はい。
- ( ) 中村：田中先生、本をお書きになったんですね。  
鈴木：ええ。

この質問は、他人に関する情報についてたずねられた場合に「はい」「ええ」どちらで応答するかを見るために作成した例文である。そのため、「はい」「ええ」に×をつけた回答は明らかに誤答であるが、それ以外は誤答とは言えない。

**表 11：例8(第三者)の回答結果**

\* 網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

回答	9年以上	9年未満
はい○ええ○	2	0
はい○ええ△	1	1
はい△ええ○	1	1
はい×ええ○	2	4
はい△ええ×	0	1
合計	6	7

9年以上の被験者については以下の回答が得られた。2名が「はい」も「ええ」も自然であると回答した。1名が「はい」が自然、「ええ」は条件によっては可能だと答えた。1名が「ええ」が自然、「はい」は条件によっては可能だと答えた。2名は「ええ」が自然、「はい」が不自然であると答えた。

9年未満の被験者については以下の回答が得られた。「はい」「ええ」ともに自然という正答を選んだ人はゼロだった。1名が「はい」は自然で「ええ」は条件によっては可能だと答えた。1名は「ええ」は自然、「はい」は条件によっては可能と答えた。また4名は「ええ」が自然、「はい」は不自然だと答えた。1名は「はい」は条件によっては可能、「ええ」は不自然であると答えた。

ほとんどが「ええ」は使用できると回答しているが、9年未満の被験者で1名のみ使用できないと答えた。

例9 状況：年配でベテランの社員が新入社員に向かって聞いている

( )年配でベテランの社員：田中さんのペン、お借りしてもいいですか。

新入社員の田中：はい。

( )年配でベテランの社員：田中さんのペン、お借りしてもいいですか。

新入社員の田中：ええ。

待遇の観点から言えば、目上に対しては「はい」と答えるのが一般的である。しかし、目上が目下に対して「許可を求める」という場面においては、目下が「ええ」を使うことによって、「許可を求める／許可を与える」という関係を固定化せず、結果として親近感と丁寧さを生じる効果があるとも考えられる。したがって、「はい」「ええ」とともに可能だと考えられる。

表 12：例9（許可求め・上→下）の回答結果 \*網掛け部分は誤答、網掛けの無い部分は正答の数字

	9年以上	9年未満
はい○ええ○	1	1
はい○ええ△	2	0
はい○ええ×	3	5
はい△ええ×	0	1
ええ△はい×	0	0
合計	6	7

9年以上の被験者については以下の回答が得られた。1名が「はい」も「ええ」も自然であると回答した。2名が「はい」が自然、「ええ」は条件によっては可能だと答えた。3名が「はい」が自然、「ええ」は不自然だと答えた。

9年未満の被験者については以下の回答が得られた。「はい」「ええ」ともに自然という正答を選んだ人は1名だった。5名は「はい」は自然で「ええ」は不自然と答えた。1名は、「はい」は条件によっては可能、「ええ」は不自然と答えた。

9年以上の被験者、9年未満の被験者とも「ええ」より「はい」を自然とした回答が多いが、これは会話の設定における目上目下の関係が明らかことが要因となっていると推測される。しかし、「ええ」の許容度については認識に違いが見られる。9年以上の被験者は3名が「ええ」を許容しているのに対し、9年未満の被験者においては、「ええ」を許容しているのは1名のみであった。

## 5. 考 察

以上の結果から、浮かび上がってきた傾向について考察する。

- 1) 9年未満の被験者(1~7)と9年以上の被験者(8~13)では、誤答率に大きな差異が見られた。以下の表は、被験者の誤答率を示したものである。誤答率の平均を見ると、9年未満は61.03%、9年以上は27.27%となっており、倍以上の開きがあることがわかる。

表 13：被験者別誤答率

	学習歴	日 本 滞在歴	学習歴 ＋ 日本滞在歴	誤答率
1	半年	5ヶ月	9ヶ月	5/11
2	1年2ヶ月	4年	5年2ヶ月	6/11
3	3年	1年	4年	5/11
4	3年	1年半	4年半	6/11
5	4年	1年	5年	9/11
6	4年	2年	6年	5/11
7	4年	2年	6年	11/11
8	4年	6年半	10年半	3/11
9	4年	5年	9年	0/11
10	5年	8年	13年	4/11
11	7年	6年7ヶ月	13年7ヶ月	5/11
12	10年	2年	12年	3/11
13	12年	1年	13年	3/11

- 2) 誤答が全く無かった被験者9は、通訳・翻訳に従事しており、職業柄、日本語に対する意識が高いと推測される。アンケートに付された「はい」「ええ」の使い分けの基準に関する質問において、相手との関係、場所・場面や状況、話題、自分の気持ち、性別、すべての項目についてコメントを記している。以下が被験者のコメントである。なおコメントについては、回答者の記述を原文どおり忠実に記載した。
- ・目上の人にはできるだけ「はい」を使うようにしている。
  - ・仕事の場合は、できるだけ「はい」を使うようにしている。
  - ・プライバシーでない話題の場合はできるだけ「はい」を使うようにしている。
  - ・自分の気持ちがはっきりしない場合は「ええ」を使うかもしれない。
  - ・女性にたいして「ええ」を多く使うかもしれない。
- 被験者の中でもっともコメントが多かったことから、被験者9の日本語に対する意識の高さがうかがわれる。
- 3) 例1(先行文なしの呼びかけ)、例2(出席に対する応答)、例5(教師から学生への注意)においては、9年以上の被験者は全員が正答であった。このうち例2、例5は9年未満の被験者においても誤答が少なかった。この2項目の場面は、教室活動や日常生活において接する機会が多いからではないかと推測される。一方、例1は、9年以上の被験者が全問正答であったのに対し、9年未満の被験者の正答は1名にとどまった。例1の場面は、例2や5にくらべて、教室活動や日常生活において接する機会が少ないからではないかと推測される。また、先行文なしの呼びかけに対する応答が導入されているテキストは非常に少ない(二宮・金山2008)。
- 4) 例7-1(店員と客の会話)と7-2(客同士の会話)においては、9年未満の被験者の正答はゼロであった。例7-1については、被験者全員が「ええ」を選んでいない。従業員と客という関係においては、「はい」が適切であると判断したものと思われる。つまり改まり度の観点を優先していることがうかがわれる。例7-2については、立場が

同等の話者間では「ええ」が使用できる可能性が高まるということを理解していない被験者や、「はい」は使えないと判断してしまっている被験者が見られた。

## 6. まとめ

以上、アンケートの調査結果から非母語話者の「はい」「ええ」の使い分けについて考察を試みた。その結果、学習歴と日本滞在歴が9年以上の非母語話者と9年未満の非母語話者では、理解度や認識に違いがあることがうかがい知れた。しかしながらこの調査では、被験者の学習歴についての詳細なデータがないため、大まかな傾向をとらえたにすぎない。また、被験者13名のうち12名は中国人であり、偏りがあった。今後の調査では、学習歴・学習環境・使用教材などについて詳細なデータをそろえた上で、レベル別における習得度や意識の違いを分析する必要があると思われる。

## 注

- (1) 質問Ⅰの△「条件によっては可能」という回答については、質問ごとにその条件について問うことはしなかった。質問Ⅳ、Ⅴにおいて回答者の使い分けの基準や条件についてまとめて記述してもらった。

## 参考文献

- 金山泰子・二宮理佳(2007)『『はい』『ええ』の使い分けに関する意識調査』『ICU日本語教育研究3』pp.3-31 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 金山泰子・二宮理佳(2009)『『はい』『ええ』の使い分けに関する調査—漫画を使用したアンケートを通して—』『ICU日本語教育研究5』pp.19-44 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 北川千里(1977)『『はい』と『ええ』』『日本語教育』33号 pp.65-72 日本語教育学会
- 富樫純一(2002)『『はい』と『うん』の関係をめぐって』定信利之編『『うん』と『そう』の言語学』pp.127-157 ひつじ書房
- 日向茂男(1980)「談話における『はい』と『ええ』の機能について」『国立国語研究所報告』65号 pp.215-229 国立国語研究所
- 二宮理佳・金山泰子(2006)『『ええ』の機能についての一考察—『はい』との比較を通して—』『ICU日本語教育研究2』pp.51-63 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 二宮理佳・金山泰子(2008)「初級教科書に現われる『ええ』についての調査報告—初級における応答表現指導についての一考察—』『ICU日本語教育研究4』pp.39-57 国際基督教大学日本語教育研究センター
- 二宮理佳・金山泰子(2010)『『はい』『ええ』の使い分けに関する考察—テレビ映像を使用したインタビュー調査による—』『ICU日本語教育研究6』pp.3-24 国際基督教大学日本語教育研究センター
- McGloin, Naomi H. (1991) Hai and Ee : An Interactional Analysis. *Japanese/Korean Linguistics*.

## **A Study of the Difference in the Recognition of “hai” and “ee” by Non-Japanese Speakers**

Yasuko KANAYAMA , Rica NINOMIYA

This study examined the difference in the recognition of “hai” and “ee” among 13 non-Japanese speakers through a questionnaire in 2006. We analyzed the influence of factors such as the duration of Japanese study and of residence in Japan on the participants’ recognitions.

Our results revealed several significant differences in recognition between those whose total duration of Japanese study and residence in Japan was less than 9 years and those who spent more than 9 years for the same. The latter correctly responded with “hai” or “ee” twice as frequently as the former. For both groups, the percentage of correct answers was high for the usage of “hai” and “ee” regarding encounters in everyday life or in the Japanese language class. For those who spent less than 9 years, closeness and the honorific aspect were more influential in deciding whether to use “hai” or “ee.” Therefore, many of them did not choose “ee” where this option could have been correct.